

上を表す前置詞 Upon/ On そして In の意味論

—前置詞の包括的な分析にむけて—

花崎 美紀¹・花崎 一夫²

Keywords: 前置詞、棲み分け、認知言語学、通事的視点、onomasiology

1. はじめに

形式が異なれば意味も異なる、すなわち形式と意味には一対一の対応関係があるという iconicity (類像性) を唱道する (Bolinger 1977) のが認知言語学の基本的立場である。ところが、一般的な英語辞典の代表である Oxford Advanced Learner's Dictionary における前置詞の記述を見てみると、*upon = on* と書いてあり、これはアイコニックな立場を反映していないという点で問題である。

また、(1)(2)(3)の例文にある *on* は英語学習者を悩ませ、さらに、上述のアイコニックな立場からすれば、説明上、困難をきたすものである。

(1) on sale

(2) he is on the team

(3) march on London

(1)や(2)は、日本語に訳すと「上」というよりは「中」に近い意味があるようであるし、(3)は、「向かって」を表すため、*to* に近いように見える。つまり一見したところ、これらは *on* の多くの用法における「上」という意味とかけ離れており、アイコニックな立場からすると、説明を要する用法であると言えよう。

上記の2つの問題に答えを与えねばならないのが認知言語学者の宿命とも言えるが、これらの問題も視野に入れながら、上を表す前置詞 *upon*, *on*, そしてそれらに関連が深い *in* の意味論の認知言語学的記述を行うのが本稿の目的である。

2. 理論的枠組みと本稿の論点

前置詞の多義研究においては、当該前置詞の意味のみを研究するのでは十分でなく、近似義語の意味も同時に調査する、すなわち *onomasiological* な視点を加えることが重要である。言い換えれば、*fruit* には果実という意味もあれば成果という意味もあるというような *semasiological* な視点のみでなく、*fruit* という語は、*nut*, *produce* などで置き換えられるといった、*onomasiological* な視点を加えて語の棲み分け研究を行うことが肝要である。(Dirven & Vespelaar 1998) したがって、前置詞 *on* と *upon* の意味研究を行う際にはそれぞれの単語の意味

* 本論文は、花崎美紀が日本英語学会第59回大会において口頭発表した内容を加筆修正したものである。

¹ 信州大学人文学部准教授

² 信州大学全学教育機構准教授

研究を行うのみならず、それぞれの近似義語である *in* の意味研究も同時に行わなければならないということになる。

一方、*semasiological* なアプローチにおいては、当該の単語の意味分析を2つのレベル、すなわち、中心的意味と用法のレベルで行わねばならない。言い換えれば、様々な用法を生み出す多義語の中心的意味を求めると同時に、ある単語における様々な用法の意味的な拡張を調査する必要がある。そして用法の拡張が単語の中心的意味の変化をもたらすこともあると考えるのが本稿の立場である。すなわち、用法の拡張と中心的意味の間には緊張関係が存在し、それがどのようなものかを明らかにする必要があるわけである。

意味的に近い関係にある2つの単語が意味的に重なりを見せた場合には、少なくとも2つの可能性が生まれると考える。1つは、2つの単語がお互いに意味が重ならないように意味変化を起こし、意味の面での棲み分けを行うという可能性である。もう1つは、一方の単語の意味が変化せず、もう一方の単語は、慣用表現としてのみ対立する語の意味を残すという可能性である。具体的に図を用いて説明すると以下のようなになる。

(4)

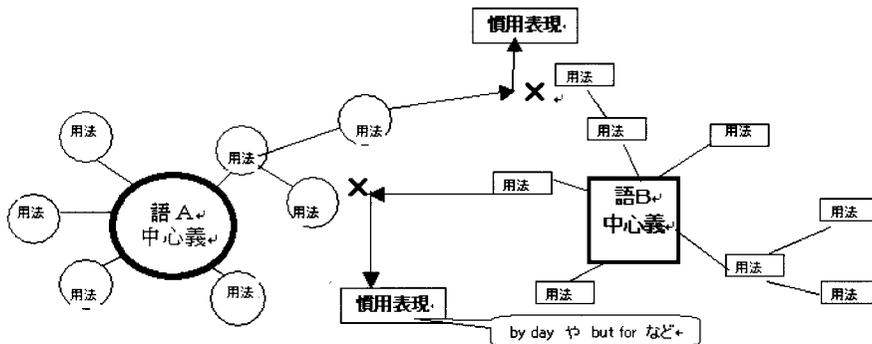


Figure 1: 近似義語の意味拡張のモデル図

上図で、*by day* (昼間に) は、*in* と *by* が競合した際に *in* が競り勝ち、その結果として、現在では *in* の意味になっている *by* の用法が慣用表現としてのみ残ったことを示している。

本稿で取り上げる単語の *onomasiological* な分析に関しては、*on* と *in* の棲み分けのために *upon* が導入されたと考える。そして、*upon* が導入されたことと *in* と *on* の意味拡張によって当該単語の中心的意味に変化をもたらされたと主張する。

最後の論点としては、多義語の研究には時として通時的な視点が重要になるということが挙げられる。具体的には、本稿で取り上げる前置詞の *on* は、現在では一部の成句を除けば、空間的に上を表す用法が主流となっているが、それは *on* と *in* の間で棲み分けが起こった結果であると、通時的な視点から主張することが可能である。つまり、空間的に上の意味が *on*、空間的に中を表す意味を *in* が担うようになった結果であると言うことである。

以上の理論的枠組みと論点をもとに以下のセクションで具体的な前置詞の分析を行うこととする。

3. 先行研究

On の多義を扱った先行研究は多いが、それらは次の2つに大分できよう。すなわち中心義を「接触」とするものと、中心義を「支え」とするものである。

3.1. 中心義「接触」

松本(1991、1992、1993)をはじめとする多くの研究では、*on* の中心義は「接触」であるとしており、これに疑問を挟む者はいないと思われる。この流れには Leech (1969), Bennett (1975)なども含まれよう。

3.2. 中心義「支え」

しかしながら、「接触」では *the picture on the wall* に見られる *on* の意味が説明できないとして「支え」を主張する立場をとる研究もある。(Garrod et al. 1999 など) つまり、*geometric* (空間的) な説明だけでなく、*functional* (機能的) な説明を加える必要があるとしている。(Garrod et al. (1999), Talmy (1988))

3.3. 先行研究への批判

いずれの立場をとるにせよ、以下の例などに見られる *on* の用法がどのようにして出てきたのかを説明しなければ正確な意味記述がなされていないという誹りは免れない。

- | | |
|------------------------|---------------|
| (5) a. march on London | ロンドンへ行進する |
| b. a house on fire | 火に包まれている家 |
| c. a town on the river | 川沿いにある街 |
| d. agree on price | 価格に関して合意する |
| e. He died on me. | 私は彼に死なれてしまった。 |

これらの例に出てくる *on* は、「接触」「支え」のいずれでもうまく説明できないのは明らかである。本稿ではこれらの例の説明も含めて、*on/ upon/ in* の棲み分けの記述を行うのが目的である。

4. *On* の意味分析

以下が、Webster による *on* の意味記述である。

(6) Webster による *on* の意味記述

- | | |
|--|---------------------------------|
| a. [prep] position over and in contact | the book is <i>on</i> the table |
| b. [prep] presence within | rode there <i>on</i> a train |
| c. [prep] along a whole surface | a streak <i>on</i> the wall |
| d. [prep] contiguity, dependence | a fly <i>on</i> the ceiling, |
| | a town <i>on</i> the river, |
| | work <i>on</i> the committee |

e. [prep] position in place, direction, time	<i>on</i> the west, <i>on</i> Monday, <i>on</i> arriving home
f. [prep] involvement	<i>on</i> fire
g. [prep] manner	did it <i>on</i> the sly
h. [prep] object	march <i>on</i> London, smiled <i>on</i> her
i. [prep] reference ABOUT	agree <i>on</i> price
j. [prep] Agency	cut her finger <i>on</i> a knife
k. [prep] succession	loss <i>on</i> loss
l. [prep] object of reference	drinks are <i>on</i> me, die <i>on</i> me, long hours began to tell <i>on</i> him
m. [adv] in contact	put a record <i>on</i>
n. [adv] covering	put a clean shirt <i>on</i>
o. [adv] forward, continuously	from here <i>on</i> , read <i>on</i>
p. [adv] in succession	pass the note <i>on</i>
q. [adv] into action	turn the lights <i>on</i>
r. [adv] into process of doing something	a star will be <i>on</i>
s. [adv] in a condition decided on	has nothing particular <i>on</i>
t. [adv] into the state of being aware	quickly got <i>on</i>

("on" in Webster)

これらの例を見てもわかるように、*on* の中心的意味としては「接触」と「支え」を想定するというのが本稿の立場である。(花崎 2006) ただしそうすると、すでに述べたように、以下のデータ ((7)として再掲) が問題になる。以下、これらのデータを中心に見ていく。

(7) a. march <i>on</i> London	ロンドンへ行進する
b. a house <i>on</i> fire	火に包まれている家
c. a town <i>on</i> the river	川沿いにある街
d. agree <i>on</i> price	価格に関して合意する
e. He died <i>on</i> me.	私は彼に死なれてしまった。

まずは、(7a)であるが、OED による次の説明が有効であろう。

(8) from the earliest times expressing motion to or towards such a position; these two senses being (as in the preposition *in*) distinguished by the *case* of the word affected, the former taking, in OE., the *dat.* (rarely the instrumental) for earlier locative, the latter the *acc.* or case of motion towards. But the OE. point of view often differed from the modern, so that the accusative was not seldom used where we should expect the dative, and *vice versa*.
("on" in OED)

古英語の時代においては、格の使い分けによって動きの有無を示していた。具体的には、与格によって *locative* を、対格によって *motion towards* を表していたというのである。つまり、この(7a)は、「接触」の意義に、*motion towards* の意味を対格が足している用法と見ることができ、中心義が「接触・支え」であるとする本論の結論と一致していると言えよう。したがって、「～へ向かって」という意味で *on* が使われていたものが、*in* との意味の競合を経てそのまま慣用的に現代英語に残ったと考えられる。

次に(7b)についてであるが、これは明らかに現代英語では *on* の代わりに *in* を用いる方が意味的にはわかりやすい場合である。例えば、現に *on life* や *on wait* のような場合には、それぞれ *in life* や *in wait* という言い方があるくらいである。それにもかかわらずなぜ **a house in fire* という言い方をしないのかと言えば、これも *in* と *on* の間に起こった意味の競合の過程で、多くは *in* にゆずったと考えられるが、*a house on fire* は慣用的に残った表現であるから現代英語に存在していると考えられる。これも、OED がうまく説明をしている。

- (9) Of state, condition, action: (a) with a n., as *on fire, on live, on sleep, on wait, on the tap*; (b) with noun of action, as *on loan, on sale, on the look-out, on the move, on the run, on the wane, on the watch*; (c) formerly with vbl. n., as *on singing, on building*.

In (b) *on* is still normal; of those in (a) most have now *in*, (*in life, in wait*), some retain *on*, many have reduced it to *a*, now written in comb. (*afire, alive, asleep*: see 30); (c) is *obs.* or *arch.*, *on* having been first reduced to *a-*, and then omitted in mod. Standard Eng., whereby the vbl. n. comes to function as a pres. pple. (the ark was *on building*, was *a-building*, was *building*). See a *prep.* 11–13; *-ing*¹, *-ing*². (OED)

- (10) Formerly used of any time or period, where current usage has *in, at, during, by*. (Also before the advb. genitives *dayes, nightes*, which were perh. then taken for plurals.) *Obs.*

æ893 K.Ælfred *Oros.* i. i. 17 *On huntode on wintra & on sumera on fiscope.* (OED)

上の OED の記述にもあるとおり、古英語の時代においては *in* と *on* が区別されずに用いられていたことが知られている。

実際に、牧野(1991, 1993a, 1993b, 1994)は *Bede's Ecclesiastical History* の中において、どのような前置詞が使われているかを詳細に記述しているが、その中で、*on* と *in* が混同して使われている例が多く見受けられると指摘している。以下はその一例である。

- (11) a. *swa freo mid heora cyninge drihtne Criste þam soðan cyninge for þam ecam ruce in heofonum gegeonde þeiwiden* (94/8)

このように、彼らは自由を得て、彼らの王と共に、天にある永遠の王国のために、真の王であるキリストに喜んでつかえた。

- b. *þy æfteran geara þæs ylcan Uocatis þæt he forðferde of þyssum life, 7 ferde to am soðan life þam þe on heofonum is:* (240/13)

このウォカテス王の治世2年目に彼はこの世を去り、天にある真の生命へと赴い

た。

(*Bede's Ecclesiastical History*) (牧野1991: 207)

本稿が提唱する(4)の図式を使えば、この用法は簡単に説明できよう。(7b)は英語教育の現場では、「成句」として扱われる意味用法であるが、これらは、*in*と*on*が競合し、棲み分けた結果、慣用句として残ったものと説明される。実際に、用法を重視する Cobuild においては、*on fire* の様な用法は *on* の項目には見ることができず、*fire* の項目の中に、成句として記載がある。このことから、この(7b)のような用法は、成句としてのみ生き残っている、そしてそれは *in* との棲み分けによってもたらされたと説明できよう。

次に(7c)(7d)について見てみることにする。これらの例には、2つの共通点があると言えよう。まず1点目としては、両用法とも、ぼんやりとした近接を表すという点で共通点がある。(7c)に関しては、街は川の近接地帯と言えるであろうし、(7d)に対する Webster の説明が *about* を使っていることから明らかな通り、広い意味における価格について合意したという意味であろう。また、これらの用法にはもう1点共通点があり、それは、比較的新しい用法であるということである。OEDによると、(7c)の用法の初出は1200年頃、(7d)は1400年頃である。では、その前にはどの前置詞がこの用法を担っていたかという点、*by* が担っていたというのが加藤・花崎 (2003), Hanazaki & Kato (2003, 2004)の主張である。

加藤・花崎(2003), Hanazaki & Kato (2003, 2004)は *by* の多義を考察し、*by* の意味ネットワークは以下であると結論づけている。

(12)

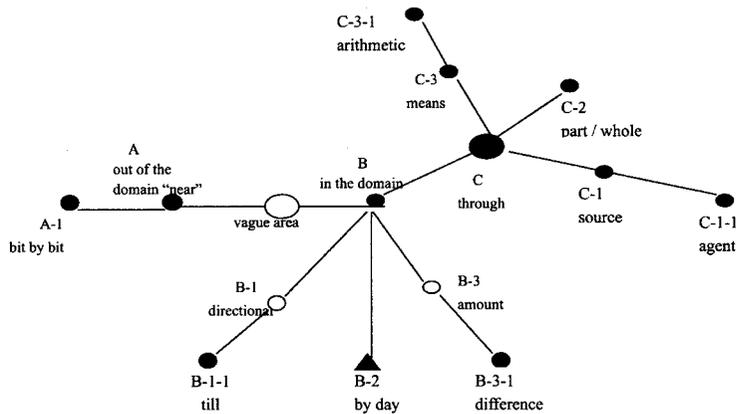


FIGURE 2: The Semantic Network of *By*

この中で *on* に関係するところだけを取り出すとするならば、*by* の中心義は *vague area* であったものが、その意味を放出し、*Catholic Homilies* の頃には、*<in the domain>* の意味用法が中心義となり、ME 以降 PE になると、*<through>* の意味が中心義となると論じている。

ここでいう *Vague Area* とは、OED の説明による。

(13) OE 期における「by=vague nearness」の説明

On (vaguely and indefinitely), in the region or domain of. *Obs. exc. in phr. by land, etc..*

þa vt-lazes beoð swa stronge bi watere & bi londe.

(OED)

つまりは、上野(1995)、上野&金杉 (1997a, 1997b)が名付けるところの「そこらへん」という意味が *by* の中心義であったが、*by land* の様な成句を残して、*by* はしっかりと「中」と「外」の意味に分化していったのである。となると、*by* の中心義の変化により、*by* の「そこら辺」と「～について」が吸収先を探しており、混同されて用いられていた *on・in* は、「そこら辺」を表す *by* と近い関係にあり、*on・in* がその漠然とした近接を吸収したと考えられよう。さらに、その中でも *on* が担ったのは、その頃には、*on* と *in* の棲み分けが進んでおり、*in* は厳密にある範囲の中を表すようになったので、「近接」であるために、*on* が担うようになったと論じることができよう。歴史的にも、*by* が「そこら辺」の意味を失う頃と、*on* に漠然とした隣接を表す(7c)(7d)の様な用法が現れ始めた年代もだいたい重なる。

よって本稿では、(7c)や(7d)の様な用法は、*on* と *in* の混同により、*by* が放出した「そこら辺」の意味を吸収したものであると提唱する。

最後に(7e)の用法であるが、これは *on* と *in* が棲み分けを行った際の弁別素性が、<力関係>であると論じれば、問題なく説明できるであろう。つまり、*on* はその中心義に<支え>を持つほどに、関係する2項の間に、支え・支えられるものという関係をもつということを表す前置詞である。よって、この<支え>の意味が派生し、影響を及ぼすものと及ぼされるものという2者の関係を表すようになったと考えればよいと結論づけられる。

以上、*on* の多義を中心義を<上・支え>とし、その中心義から一見離れているように見える(7a-e)のような用例も、*in* や *by* などとの緊張関係によって説明できる、つまり、onomasiological な視点を持てば説明できることを見てきた。

5. On / Upon の意味論

ここで説明しなければならないことは、なぜ *on* と *in* の意味の棲み分けが起こったかということである。これに関しては、Niwa (1998)および Niwa(1999)が参考になる。

Niwa(1998, 1999)では、まず1998年の論文で *on* を歴史的に考察し、1999年の論文で他の前置詞とともに *upon* を説明しているが、*on*、*upon* に関して、それらの論文は、以下の3点の結論を挙げているといえよう。1) *On* が West Saxon で使われ、Anglican ではその代わりに *in* が使われていたことを明らかにした。これは、P.Chr には、たくさんの *in* がでてくるのが証拠としてあげられると論じている。2)さらに、*upon* は、*on* が ME に *uppan* となり、それが13世紀に *upon* と変化したという Meroney (1943)に反論し、*upon* は、“cumulative tendency”(Niwa 1999:295)、つまり、意味が弱くなった語は同じような意味をもつ語を重ねることにより意味を強化することを通して、*up+on* として生成されたと主張する。3)そして13世紀頃に *upon* が生成されるのと同時に、*on* が一時使用されなくなり、*upon* と *in* が両地方で使われるようになったが、その2つが用法を別にすると同時に *on* が復権して、*on* と *upon* と *in* が使われるようになった、と論じている。

上の論を図示すると、以下のようになるであろう。



FIGURE 3: *On, In, Upon* の棲み分け図

つまり、すでに指摘したように、古英語では *in* と *on* を区別しないで用いることもあったわけであるが、中期英語の時期になって、cumulative tendency により、明らかに「接触」を意味する *upon* が登場し、そのため一時的に *on* が使われない時期が生まれ、その時期を経たのちに最終的には *on* は主に「接触」の意味で使われるようになり、*in* との棲み分けが起こったと言えるのである。

6. 結語

本稿では、*on* と *in* の棲み分けのために *upon* が導入されたと考え、さらに *upon* が導入されたことと *in* と *on* の意味拡張によって当該単語の中心的意味に変化がもたらされたと主張することで、(7)のようなやや周辺のデータに対しても妥当な説明を与えることができたと言えよう。

また、多義語の研究には時として通時的な視点が重要になることも十分に示されたと言えよう。具体的には、本稿で取り上げた前置詞の *on* は、現在では一部の成句を除けば、空間的に上を表す用法が主流となっているが、それは *on* と *in* の間で棲み分けが起こった結果であると、通時的な視点から主張することが可能であることが示された。つまり、空間的に上の意味が *on*、空間的に中を表す意味を *in* が担うようになったということが、通時的な視点から確認できたわけである。

参考文献

- Bennet, David C. (1975) *Spatial and Temporal Uses of English Preposition: An Essay in Stratificational Semantics*. London: Longman.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. London: Longman.
- Dirven R. & M. Verspoor (1998) *Cognitive Exploration of Language and Linguistics (Cognitive Linguistics in Practice)*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Garrod, Simon, Gillian Ferrier, and Siobhan Campbell (1999) "In and on: investigating the functional geometry of spatial prepositions", *Cognition* 72. pp.167-189.

- 花崎美紀 (2006) 「上を表す前置詞の多義と棲み分け」日本英語学会第 59 回大会, 2006 年 11 月, 東京大学.
- Hanazaki, Miki & Kozo Kato (2003) "The Semantic Network of *By*", *Studies in Modern English: the Twentieth Anniversary Publication of Modern English Association of Japan*, 英潮社, pp.337-52.
- (2004) "The Semantic Network of *By* Revisited", 『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』第 38 号, pp.23-38.
- 加藤鉦三&花崎美紀 (2003) 「*By* の意味ネットワーク」, 近代英語協会第 20 回大会, 2003 年 5 月, 東京外国語大学.
- Leech, G. N. (1969) *Towards a Semantic Description of English*. London: Longman
- 牧野輝良(1991) "BEDE'S ECCLESTICAL HISTORY における前置詞 *in* と *on* の関係について (1)", 『駒沢大学外国学部論集』34, p. 197-213.
- (1993a) "BEDE'S ECCLESTICAL HISTORY における前置詞 *in* と *on* の関係について(3)", 『駒沢大学外国学部論集』37, p. 201-219.
- (1993b) "BEDE'S ECCLESTICAL HISTORY における前置詞 *in* と *on* の関係について(4)", 『駒沢大学外国学部論集』38, p. 119-139.
- (1994) "BEDE'S ECCLESTICAL HISTORY における前置詞 *in* と *on* の関係について(5)", 『駒沢大学外国学部論集』39, p. 35-53
- Meroney, H. M. (1943) *Old English Syntax*. I, II. Oxford: Clarendon Press.
- 松本理一郎(1991) "前置詞 ON の中核的意味について" 『千葉商大紀要』29-3, pp.69-96.
- (1991-1993) "比喩的拡張について—前置詞 *on* の場合—"(1)-(6), 『千葉商大紀要』29-4 ~31-3.
- Niwa, Yoshinobu (1998) "The Preposition *On* -- A Historical Semantic Study" 『金城学院大学論集』39, pp. 275-294.
- (1999) "A New Explanation of the Formation of *INTO*, *OUT OF*, and *UPON* in Old English" 『金城学院大学論集』40, pp. 293-313.
- Talmy, Leonard (1988) "Force dynamics in language and thought" *Cognitive Science* 12, pp. 49-100.
- 上野義和 (1995) 『英語の仕組み』, 英潮社.
- 上野義和&金杉高雄(1997a) 「英語の意味変化(1)」『京都外国語大学研究論叢』47, pp. 8-28.
- (1997b) 「英語の意味変化(2)」『京都外国語大学研究論叢』48, pp. 1-8.

辞書

OALD

Webster the Third

OED

Cobuild

(2008年11月14日受理、11月18日掲載承認)